
Double Wind - 探求の風フロル -

R y u

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Double Wind - 探求の風フル -

【Nコード】

N8528Y

【作者名】

Ryu

【あらすじ】

一人の少女と少年が出会う時、新しい風が吹き始める……………

感動の長編ファンタジーが今幕を開ける……………！

プロローグ 風と月と炎の出会い（前書き）

この作品を覗いてくれている読者の皆様にまずはお礼を言います。

更新が遅くなる事もあるかも知れませんがこの作品と長く付き合っていていただければ幸いです。

ではお楽しみください・・・。

プロローグ 風と月と炎の出会い

トアル大陸・・・

「ここがチャタインから聞いていた世界か・・・。」

「そうだちゅん・・・。」

少年と謎の生物が空中にいた。

「ところでチャタインのやつ着地の事は考えてたんだろうか・・・？」

「・・・たぶんかんがえてないちゅん。」

そう、二人は落下していた。

「うわああああー！！！！！！」

「チャタインおぼえてろちゅん！！」

ズドオオオオオオ！！

ソヨカゼの村

フロルの家

「う．．．ううん。」

小さな村の小さな家で一人少女が目を覚ました。

「もう、朝かあ．．．。」

彼女の名はフロル＝ウィンディア、この村では風の巫女と呼ばれる少女である。

「．．．なんか変な夢見ちゃったな。」

フロルは少し考えた。

「．．．そうだ、こんな日は妖精の森にお祈りにいこうかな。」

フロルは着替えてから弓を持って家を出た。

妖精の森

「いつ来ても落ち着くなあ．．．、虫や動物たちの声、それに風の音．．．。」

フロルは目をつぶり風を感じていた。

「・・・と、こんなことしてる場合じゃなかった、弱いといっても魔物もいるし、気をつけなきゃ。」

フロルは気を入れ直し森の奥へと進んだ。

フロルは大きな石扉の前まで来た、だがそこには・・・。

「・・・！？、人が倒れてる！」

フロルは倒れている少年の元へと駆け寄った。

「だ、大丈夫ですか・・・？」

「・・・ん、君は？」

「えと、フロル＝ウィンディアって言います、近くの村に住んでいて・・・。」

「そうか、オレはヤイバ、月光ヤイバ、こいつはぺっとちゅんっていうんだ。」

「よろしくちゅん！」

「じゃあ、オレたちは先を急ぐから・・・。」

「え、ちょっと待ってください！」

フロルはヤイバとぺっとちゅんを呼び止めた。

「なんだい？」

「急ぐって、そんなに大事な事があるんですか・・・？」

「うーん・・・。」

ヤイバは困った表情でぺつとちゅんを見つめた。

「ちゅんをみられても・・・。」

ぺつとちゅんはヤイバから視線をそらした。

「まあ、なんて言うか話しづらいことなんだよな・・・。」

「まさか何かやましいことでも考えてるの？」

「ち、違うよ、それは断じて違う、・・・なあぺつと・・・。」

ヤイバが再びぺつとちゅんに助けを求めたので彼も何かを決意したようだ。

「わかったちゅん、ヤイバはなしてちゅん。」

「おう・・・。」

ヤイバは助かったと言う表情を浮かべたあと、真面目な顔つきで話しはじめた。

「実はオレたちはこの世界の人間じゃ無い。」

「えっ!？」

「オレたちの元いた次元にはチャティン博士って言う変わり者だけども凄い天才な科学者いてね、その人がある日ある次元に起きた異変を見つけたんだ、ほんの偶然だけだね。」

「チャティンはほおっておくのもまずいだろうからちゅんとヤイバにいへんをかいけつするよーにいったちゅん。」

「その異変って・・・？」

「それはオレたちも聞いていない、詳しくは妖精王に会えばわかって言っていたけど・・・。」

「・・・・・・・・」

「（やっぱり信じてくれないよな・・・。）」

しかしフロルから返ってきたのは予想もしなかった言葉だった。

「・・・放っておけない。」

「へ？」

「放っておけないよ、そんな話！」

思った以上に彼女の正義感は強かったようだ。

「わたしにも手伝わせて！」

「あ、あはははは・・・。」

ヤイバはとりあえず笑うしかなかった・・・。

「そうと決まれば二人ともわたしの家に来て、旅の準備をしなきゃ！」

三人が旅の準備をするため村に行こうと歩きだしたそのとき・・・

『待て・・・！』

「！？、避ける、フロル！」

「きゃあ！」

突如炎の弾丸がフロルに向かって飛んできた！

しかしヤイバがかばったことによりフロルは炎の弾丸をかわすことができた。

『チツ・・・！』

「なんなんだお前は！」

炎の飛んできた方へ視線をやるとそこには赤い仮面とマントに身を包んだ人物がいた。

『貴様に名乗る必要は無い！』

今度は赤マントの男（？）が炎の斬撃をフロルに飛ばしてきた。

「くっ！」

フロルはギリギリでかわし赤マントの男(?)に弓を向けた。

「食らえ！」

ビュッ！

『む、風の魔力を纏った矢か、だがその程度オレには通用せん！』

男(?)はフロルに向かって走りより、大剣を降り下ろした。

『死ね！』

ブウン！

がキンッ！

『な、何！』

フロルに降り下ろされた剣は謎の青年により止められていた。

「・・・・・・・・」

『き、貴様はブルー・イグニス!!』

ブルーと呼ばれた青年は赤マントに剣を降り下ろす。

『く、だがこれで貴様もまとめて葬ることができる!、死ねえ!』

赤マントは連続で剣を振り回すが・・・

ヒュッ！

キン！

ヒュンッ！

すべて避けるかガードされていた。

『ぐ、おのれえー!!』

「す、すごい、よその世界にもこれほどの手練れがいるなんて・・・」

『ぐ、クソ！、獄炎斬!』

「無駄だ・・・、焰の中に消えるがいい・・・イグニート・カリバ
ー・・・!」

グオオッ!ズドオオオ!

『ぐああああー!!』

「すごい・・・、あいつだってそうとう強いはずなのに。」

ブルーは奥義を繰り出し赤マントを倒した。

『ぐ・・・、今日のところは引き上げてやる!だが次は貴様ら全員
皆殺しだ!覚えておけ!』

ブウン・

赤マントはどこかへと突然姿を消した。

「あの、助けてくれてありがとう・・・。」

「・・・。」

「この人無口なんだな・・・。」

ブルーは無言で去ろうとしたが・・・

「あの、本当にありがとうございます！、縁があつたらまた・・・！」

ブルーは少しだけ振り向くとそのまま去って行った。

「ヤイバもありがとう。」

「え？」

「相手の魔法から助けてくれたでしょ。」

「ああ、仲間を助けるのは当然だろ。」

「仲間・・・？」

ヤイバが出会ったばかりの自分に仲間と言った事をフロルは少し不思議に思った。

「だって、一緒に旅をするんだ、もう仲間だろ！」

「・・・うん！」

三人は改めて村へと向かった。

「どうやらあいつらは無事の様だな・・・、オレはいつでもお前達を見守っている、お前達がオレの元にたどり着けたなら、その時はオレも喜んで力を貸そう、・・・ヤイバ、フロル、どんな困難な道のりだろうと決して諦めるな、・・・前に進め！」

フロルの家

「確か冒険用の服がここに・・・。」

フロルは冒険用の服を取り出しそれに着替えた。

「うん、バッチリ！、．．．それとこれも忘れちゃ駄目だね．．．」

フロルは立て掛けておいたカタナを手に取り部屋を出た。

「お待たせ、二人とも！」

「ああ！」

「ちゅん！」

「それじゃ出発！」

こうしてフロル達の壮大な冒険が幕を開けた。

つづく

ブローグ 風と月と炎の出会い（後書き）

次回はキャラクター紹介です。この先登場するキャラクターものせるので参考にしていただければ・・・。

では。

Double Wind メインキャラクター紹介（前書き）

メインキャラクター紹介です。

本編にまだ登場していないキャラクターもめています。

本編で語られない部分の解説などもしています。

極力ネタバレはしていませんつもりです。

不安な方は見ないことをお勧めします。

Double Wind メインキャラクター紹介

キャラクター紹介

Frol Windear

フロル＝ウィンディア

年齢15歳

身長150cm/体重44kg

クラス：居合剣士

主人公。

優しい心をもつ少女。

幼い頃に母を亡くし、父は行方不明、兄と一緒に暮らしていた。

しかし兄も旅の途中に命を落とした。

しかし彼女はそんなつらい過去があるにも関わらず前を向いて希望を持ち生きている。

ひよんなことからヤイバと出会い旅に出ることになる。

容姿は風を連想させる黄緑系の透き通った非常に長い長髪をしており、うっすら光っている。

瞳も綺麗な緑色をしている

服は薄い青紫に袖など縁の部分に黄緑のラインが入っている。

小柄で細身だが非常に力が強く、胸もわりと大きい。

性格は最初に書いた通り優しく、純粹、そして傷つきやすい。

時にそのまっすぐな心が災いして他人に迷惑を書けてしまうことも・・。

彼女は居合いに関しては達人級で戦闘では持ち前のスピードを生かし抜刀術を敵に叩き込む。

魔法もそこそこ使い回復、攻撃共にバランスの取れた能力の持ち主。

Y A I B A T U K I H I K A R I

月光ヤイバ

年齢？？

身長175cm / 体重60kg

クラス：大剣士

異世界からやって来た少年。

いわゆる異邦人でこの世界におとずれている異変を解決するためにやって来た。

とあることからフロルが旅についてきた。

容姿は白銀の髪にスカイブルーの瞳、男性としては髪は長いがロングでは無い。

体格はなかなか良い体つきで大剣を振り回すほどだがいわゆるマッちょでは無い。

性格は仲間だけでなく敵すら思いやることもできる心の持ち主。

元いた世界の仲間達からは甘いと言われることもあるが、信頼はされておりそこが彼の長所だろう。

戦闘では愛用する大剣を振り回し戦う。

少しだが魔法も使える。

元いた世界が科学的な発展を遂げていることを考えればすごいことだろう。

P e t T u n

ぺつとちゅん

年齢??歳

身長45cm/体重??

クラス：竜騎士

ぺつとちゅん星からやって来た、ぺつとちゅん族。

基本的には自由気ままにのんびりと生きる生物。

もちろん彼もその例に漏れない。

容姿は小さく丸いハムスターのぬいぐるみ様な外見。

クリーム色の肌をしている。

性格は自由気ままなのんびり屋。

戦闘では槍を使い戦う。

実は竜騎士は今回初めてらしい。

Aqua l W a t e

アクエル「ウォーター

年齢20歳

身長177cm/体重67kg

クラス：魔法剣士

水竜の力を操る勇者の末裔と呼ばれる青年。

彼は生まれつき水の魔法を使うことができる。

だが本来水竜の力は代々女性に受け継がれていたため本来は妹がもつ力だったと本人は思っている。

容姿は水色のウェーブのかかったロングヘアでかなりの美形、青い瞳をしている。

上記の通り容姿は相当なものだが可愛い女の子や綺麗な女性を見かけるとすぐに声をかけてしまう重度のナンパ癖がある。

ヘラヘラした態度から女性に無下にされる事もしばしば。

もちろん今の彼に本当に心を許せる親友などいない。

戦闘ではやや短めの異形の双剣と魔法を組み合わせた「魔法剣技」を使用する。

Blue Ignis

ブルー「イグニス

年齢20歳？

身長180cm / 72kg

クラス：魔剣士

フロル達の前に現れる謎の剣士。

過去は謎に包まれておりフロル達の前に度々現れ協力する理由も不明である。

容姿は黒髪だが先端の方が若干黄色くなっている。

見た感じ20歳前後の見た目だが彼から漂う雰囲気はそれ以上のものを感じさせる。

性格は無口であるため正確にはわからない。

戦闘においてはロングソードを使い戦う。

炎魔力を込めて「奥義」を打ち出す。

Ashton Odhner

アシュトン「オドネル

年齢24歳

身長184cm / 85kg

狼の獣人でトアル大陸の左側の国の王族。

長男ゴールドラン「オドネル、次男シルバリオ「オドネルが王位をめぐり争う中、彼は全くと言っていいほど興味が無い。

街の人間達に慕われており王族とは思えぬほど人々と親しくしている、があくまで獣人達だけにであり過去に人間たちから下等に見られていたことがあり人間にたいしては異常なまでの敵対心を見せる。

容姿は獣人だが獣の様な姿をしているわけではなく人間に近いものとなっている。

ボサボサの髪に右目に傷、野生的な服装をしている。

そのワイルドな外見から獣人だけでなく人間の女性まで虜にすることがある。

性格は親分肌な部分があり街の人々を上手くまとめあげている。

戦闘においてはその高い身体能力を生かしおのれの肉体のみで戦い、強力かつ正確な攻撃を加える。

魔法を使用できない体質。

K a n a G r a n d e a r

カナ「グランディア

年齢15歳

身長157cm/体重43kg

クラス：魔砲使い

トアル大陸のテッコウ山近くの町にすんでいる研究者。

他人を信じずなんでも自分だけの力で解決しようとする傾向がある。そのため彼女自信も他人から信じられずにいる。

ただし気を許した相手には甘えてしまうことも。

容姿は黒に限りなく近い茶髪で光の反射で一部だけ茶色に見える。

ツンデレを思わせるつり目に可愛らしい顔立ちをしている。

服装はガンナーを思わせる動きやすいものを来ている。

性格は上記の通り、人を疑うことから始める傾向があり、思ったことをハッキリ言う。

天才であるため他人が自分の考えを理解してくれないことがあるとすぐに腹を立ててしまう。

天才だから回りが彼女についていけないのは当然なのだが。

しかし彼女は一人が好きなのは友人が欲しいと思っている。戦闘では彼女が開発した「砲機」を使う。

魔法の才能もあり砲機と組合せ魔法を発射する。

回復魔法は苦手で使用出来ない。

O U K A M I R E N

王花 美恋

年齢 一億と数千ほど

身長 151cm / 体重 40kg

クラス：四魔王 / 踊り子

ヤイバたちの世界の魔界に住む四魔王の一人。

四魔王とはレオニス、スカルド、アルディア、オウカの四人からなる魔王達の総称である。

獣魔王レオニスは戦いを好む獅子男、骨魔王スカルドは戦いを好まない骨魔神、闘魔王アルディアは先代魔王アルザスと違い好戦的で残忍、プライドの高い悪魔、そして鬼魔王王花は関心が無いふりをしてるが人間達のことを深く愛しており見守っている鬼の姫。しかし過去に愛した男（人間）に裏切られたためか深くは干渉しようとしていない。

本人曰く若き日の過ちだとか。

容姿は紫色のサラサラの髪のパニーテール、つり目に八重歯、袖が分離している黄色い和風の踊り子の服を来ているなど特徴が多い。因みに脇丸出しである。

性格は気まぐれな気分屋に見えるが案外真面目な一面もある。

口調は「〜」である。」「わらわは〜」など特徴的で言葉の端々に甘ったるくエロい表現をよくする。

楽しい事が好きらしく、特に踊りは戦いに組み込むほど。
戦闘では魔族の身体能力と魔力を生かし踊りと雷を組み合わせて戦う。

しかし華奢なため打たれ弱いのだとか。

??????????

??????

年齢不明

身長不明／体重測定不可

クラス：????

ヤイバやフロルを見守る謎の人物。

多くが謎に包まれている。

ヤイバ達から干渉して来ない限り本人は表舞台に出る気は無い。

口振りからして敵ではないと思われるが・・・?

紫マントの男

年齢??

身長180cm／体重??cm

クラス：????

フロル達の前に度々現れるマントの男の一人。

フロルに執拗なまでに執着している。

嵐の魔法を使用する事ができ、カタナとワイドダガーん組み合わせ

た双剣術を使用する。

第一話 水神の力を操る男。(前書き)

早速新たな仲間の登場です！

フロルたちの旅をお楽しみください！

第一話 水神の力を操る男。

フーツの町

「ヤイバ、今日はもうこの町で休もう。」

「ああ、あいつとの戦いのあとすぐに出発したからな。」

「ちゅんももうくたくたちゅん。」

「お前戦ってなかっただろ。」

「いっぽんとられたちゅん。」

ぺつとちゅんとヤイバは変なやり取りをしていた。

「ねえ、早く宿をさがそ！」

「あ、ごめん！」

フロルに宿を探そうと言われたのでヤイバとぺつとは歩き出した。
すると……

キイイインッ！

ズドオオオッ！

「な、何？、何の音！？」

突如大きな音が聞こえてきた。

「広場の方だ！」

ヤイバたちは広場の方へ向かった。

広場

ズドオオオ！

「ひゅう・・・！、いやーモテる男は辛いねえ！」

一人の青年が青いマントの男に襲われていた。

『おいおい、逃げ回ってばっかじゃなくてまともに戦えよな、俺はたいくつだぜえ！』

「うおおお！」

ガキイン！

「！？」

ヤイバは青年を助けるために攻撃を止めに入った。

「大丈夫か？」

「おいおい、俺は野郎に助けてもらっても嬉しくないぜ。」

「でやあああ！！」

キイイン！

『つぎは誰だ！』

「助太刀します！」

ヤイバに続きフロルも青年を助けに入った。

「おおー、カワイ子ちゃん！」

『ぞろぞろと群れるのが好きだねえ、お前ら。』

青マントが言葉を言い終えた瞬間、青年は猛スピードで青マントに走り出した！

ギギギイン！、ギギギイン！

『ぬお！』

「俺はレディに守られるのも趣味じゃねえ・・・、俺がレディを守るんだよ！」

「ははは、面白い奴だな、あいつ。」

「うん、そだね！」

「全てはレディ達のために！」

青年は意気込み青マントに連続攻撃を仕掛ける！

ギギギン！

ギギギン！

『調子に乗んなよ！、アイスエッジ！』

青マントは氷の魔法で青年を攻撃した！

「残念！俺様にそんな攻撃は当たらないぜ！」

さらに青年に気をとられている青マントにフロルの攻撃が迫る！

「空破刃！」

フロルは風の斬撃を飛ばし、攻撃した！

『ぐああ！』

「うおお！、地爆斬！」

こんどはヤイバが技繰り出し攻撃した。

ズドオオオ！

『ぐああああ！！』

「よし、止めは俺様が・・・」

と、青年が意気込んだ瞬間・・・

ヒューー・・・

ズドオ！

「なにー！」

青マントに最後の一撃を加えたのはぺつとちゅんだった。

「りゅうきしのおうぎ、てんくうおとしちゅん！」

「あのチビ、美味しいとこだけ持っていきやがった・・・！」

青年は啞然としていた。

「あつはつは、止めだけしか参加しないなんてなあ・・・。」

ヤイバは呆れながら笑って言った。

『ぐっ、』

すると倒したはずの青マントが再び立ち上がった。

『ふふふふ、なかなかやるじゃないか、俺も正直驚いたぜ……』

『

「う、うごいたちゅん!？」

『今日の所は引き上げてやる、俺は紳士だからよ。』

「まって!、あなた達の目的は!？」

『それはまた今度……。』

ブウン……

青マントはどこかへと姿を消した。

「くっ、逃げられたか!」

「あの、所で大丈夫ですか？」

「おお、俺様を心配してくれるのかい?、レディ。」

「わ、私はフロル!! ウィンディアと言います。」

「フロルちゃんかー、可愛い子は名前も可愛いんだね……。」

青年はフロルの手を握り喋り始めた。

「俺様の名はアクエル、アクエル!! ウォータ、アクアくんって呼ん

でね、ハニー・・・。」

「はあ・・・？」

「オレはヤイバ・・・」

「ねーねー、フロルちゃんはどうして旅をしてるんだい？」

「えと・・・、ヤイバたちが世界に異変があるって言ったから放っておけなくて・・・」

「オレは月光ヤ・・・」

「フロルちゃんは正義感も強いんだねー、俺も見習わないとな！」

「でも正義は口に出すことじゃないし・・・」

「オレは・・・」

「そんなことも考えているのかあ、本当に偉いねえフロルちゃんは。」

「つー！、きー！、ひー！、かー！、りー！・・・」

「だー！、わかつたわかつた、聞いてやるから静かにしろ！」

あまりにも無視されたためヤイバは大声で名乗ろうとした。

「オレは月光ヤイバ！」

「ちゅんはぺつとちゅん！」

「野郎に珍獣ね、うん、覚えた。」

「・・・オレの苦労って。」

ヤイバは名乗ることはできたが粗末な扱い方をされてしまった。

「あの、私たち宿行きたいんです。」

「宿かい？、案内してあげるから嘸の続きでも・・・」

「あ、あはは。」

フロルも思わず苦し笑いをしてしまった。

宿屋

「・・・へえ、アクアは水の魔法を使えるんだ。」

「まあな、俺様にかかれば楽なもんよ。」

フロルたちはアクエルからアクエルのことを聞いていた。

「でも俺様以上に君たちがそんな戦いしてる方が驚きだぜ。」

「と、言ってもまだ赤いのと青いのとしか戦ってないけど。」

「ねえ、アクア、できれば私たちに協力してくれないかな？」

「……」

やっぱりダメか……

フロルは無理だと思っていたが返ってきた答えは意外な物だった。

「いいぜ、俺様退屈してたし、レディの頼みなら断る訳にはいかないしな！」

「ありがとう、アクア！」

「アクアくんって呼んでくれよ、フロルちゃん。」

「う、うん。」

こうして新たな仲間が加わった。

そして次の日……

「よし、じゃあ出発するとしますか！」

と、意気込むアクエルにぺっとはこう言った。

「おまえがしきるなちゅん！」

「うるせーなあ、おまえに言われるとムカつくぜ。」

と、二人はケンカを始めるが……。

「二人ともおいていくよ。」

フロルはケンカをしていた二人をおいて先に歩き出していた。

「待ってよー、フロルちゃん！」

「おいてかないでちゅん！」

そして・・・

地下通路

「ここを抜ければ獣王の町につくみたい。」

「こんな場所通るのかよ・・・。」

アクエルは嫌そうな顔をしたが他の三人は構わず先に進んだ。

「ま、待ってくれよお、おいてくなつて！」

アクエルも三人の後を急いで追いかけた。

そしてしばらく歩き・・・

「うーん、もうすぐ出口みたいなんだけど・・・。」

通路の途中足場がなく渡る事ができなかった。

「なあ、俺様途中で変なスイッチとでかい玉を見たんだけど。」

「もしかしてそれじゃないか？」

来た道を少し戻ると・・・

「・・・なるほど、一定の重さの物を乗せたら作動する仕組み見ただいな。」

「じゃあ俺様はあの変な玉をこっちに持ってくるぜ。」

「頼んだよ。」

数分後

「・・・ごめん、重すぎて俺様の力じゃびくともしない。」

「じゃあ今度はみんなで行こ！」

フロルに言われ、四人で玉の所に向かった。

「へえ、これか、じゃあオレがやってみる！」

まずはヤイバが挑戦した。

「ぐ、おっ、おお・・・。」

持ち上げる事には成功したが・・・

「すげえ重い・・・！」

ズドオ！

ヤイバは地面に玉をおいた。

「気をつける！地下通路を壊す気かおまえは！」

「わ、わるい……。」

「じゃあ次は私がやるね。」

「いや、さすがに無理じゃ……。」

ひょいっ！

「！？」

フロルはいとも簡単に玉を持ち上げた。

「ほんとだ、重いね、でも一人で運べないことはないよ。」

「そ、そう。」

「じゃあ、頼んだよ。」

「ちゅん……。」

三人はただ驚くだけだった。

スイッチの所

「じゃあ乗せるね。」

「ああ。」

そしてスイッチに玉を乗せると・・・

ゴゴゴゴゴゴゴゴ！ゴ

ガチャン！

遠くで何か音がした。

「よし、行ってみよう。」

出口付近

「足場ができてる・・・。」

「よし、行こーぜ。」

三人が足場をわたり終えると見覚えのある人物がいた。

「あ、あの人！」

「昨日の奴！？」

「へえ、早速再戦って事ね。」

『昨日・・・？』

「どうやら別人のようだぜ。」

そこにいたのは紫の仮面とマントに身を包む者だった。

「ねえ、あなたたちは何者何ですか・・・？」

「・・・おまえ、そんな奴らとつるんでたのか。」

「・・・！？、どういう事なの？、私を知ってるの？」

『おまえには関係無い、「俺」の目的は貴様らを生け捕りにする事だ。』

「・・・なるほど、やる気満々って訳か。」

四人は男の言葉を聞いた瞬間、武器を構え、戦闘体勢に入った。

『・・・ふう、ケルベロス死なない程度に痛めつけてやれ。』

男は三つ首の犬を突如召還した。

「来るぞ！」

ケルベロスは火炎を口から放った。

「うおっ！」

「元気のいい犬だな。」

「そんなこといつてるばあいかちゅん！」

「いくよ！」

まずはフロルが攻撃を仕掛けた。

「真空斬！」

ズバア！

『グウウウっ！』

「おっ、やるじゃん！」

さらにアクエルが魔法を放つ。

「アクアシュート！」

ビシュッ！

『グオッ！』

「つぎいくちゅん！」

しかしぺつとが攻撃しようとした瞬間・・・

『ガアアアアア！』

ケルベロスはさらに大きな火炎を吐き出した！

ゴオッ！

「うああっ！」

「うっ、あの炎何とかしないと・・・。」

「俺様にまかせな！」

「アクエル！」

「考えがあるんだ、ごによごによ・・・。」

アクエルは三人にこっそり作戦を話す。

「よし、いくぜ！」

ヤイバ、フロルがケルベロスに向かい走り出す。

『グオオオオッ！』

ケルベロスふたたび火炎を吐き出した。

「地爆斬！」

ヤイバが剣撃と地面の破片で炎を防ぐ！

「やああ！真空斬！」

フロルが居合いと共に真空の刃を作り出し切り裂いた。

『ガアアアア！』

「おっと、まだおねんねするには早いぜ。」

後ろにいたアクエルは魔法を詠唱していた。
それも強大な・・・

「そのまま水と一緒に流されちまいな！、ビッグウェイブ！！」
ズドン！

バアアアッ！

巨大な荒波がケルベロスを地下通路の奥へと押し流す！

『ガアアアアアッ！！？』

「おー、流れていく・・・」

「まあ、流されてる間に送還されるだろ。」

「そう言えばあの人は！？」

「逃げられた見たいだな。」

「あいつらのもくてきなんだったんだろうちゅん？」

ぺつとが疑問に思うとアクエルが口を開いた。

「なんでもあいつら、精霊と契約できる素質をもつ人間を狙ってい

るらしいぜ、例えば俺なら水の精霊フロッシュ、フロルちゃんなら風の精霊、ヤイバなら恐らく月、だろうな。」

「ちゅんは!？」

「いや、おまえは無理だろ……。」

ぺつとアクエルが話しているとヤイバが……

「それにしても……。」

「なんだ？」

「アクアって物知りだな!」

「な、ほ、ほめてもなにも出ねーぞ!」

アクエルは少し照れた表情を見せた。

「そ、そんなことより先行こーぜ、俺様町で休みてーよ。」

「そうだな、……ん?、フロルどうした？」

ヤイバが気づくとフロルは考え込んだ表情をしていた。

「……え?、あ、うん、ごめん。」

「さ、行こーぜ!」

一行は獣王の町を目指し歩き出した。

(あの紫マントの人、まさか・・・?)

つづく

第一話 水神の力を操る男。 (後書き)

次回は町につくのですが・・・？

お楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8528y/>

Double Wind - 探求の風フロル -

2011年11月26日17時48分発行